



公共施設とは

公共施設には大切な役割があります。その中には、義務教育のように普遍的な役割もあれば、時代の変化とともに新たに生まれてきた役割もあります。これらの様々な役割をいかに維持・向上させていくのか、前2号に引き続き、公共施設のあり方に一石を投じている施設を見つけました。これからの公共施設とはどうあるべきかを考えるきっかけとして、紹介したいと思います。

まんがパーク

東京都立川市、約24㎢と本市の4分の1の面積に、およそ17.8万人が暮らすまちです。多摩地域の交通の要衝として栄え、最近では国の機関も集まり、立川駅を中心としたエリアは、とても本市と同規模の人口のまちとは思えません。この立川市に、興味深い公共施設を見つけました。それが、[「立川市子ども未来センター」](#)の中にある「[立川まんがぱーく](#)」です。



ここは、旧市役所庁舎があった場所です。北口エリアへ庁舎が新築移転することに伴い、南口エリアの賑わいが失われないように、旧庁舎のリノベーションを行って設置された公共施設です。地階はスタジオやアトリエなどの文化芸術支援機能、1階には特別支援教育課や子ども家庭支援センターなどの子育て・教育支援関係の行政機能、そして2階に、協働事務室などの市民活動支援機能とにぎわいを創出する「立川まんがぱーく」の機能があります。

この「立川まんがぱーく」を除けば、本市にも保健福祉センターを中心に似た機能が設置されています。特に目新しい公共施設というわけではありません。では、なぜここに「立川まんがぱーく」が生まれたのでしょうか。

「立川市子ども未来センター」の整備に当たっては、DBO方式¹により、公募プロポーザルで事業者を選定していますが、にぎわい創出のための機能は、改修から運営、物品調達に至るまで、すべて独立採算で行うことを条件

¹ 設計、施工、維持管理、運営を一括して発注する方式。現在進めている西中学校等複合施設整備運営事業では、この方式を用いている。

に、事業者からの提案に委ねることとしました。その結果、事業者から提案されたプランが、この「立川まんがぱーく」だったのです。以下は、事業者がこのプランを提案した理由です。

「立川まんがぱーく」のプランを提案したのには、いくつかの理由がありますが、最大の理由は、立川という、この場所にあります。

中央線沿線と言えば、まんが、アニメ、フィギュアなどのサブカルチャーに懐が深い土地柄です。また、映画化もされた「聖☆おにいさん」を始め、数々のまんがやアニメ作品の舞台となり、“聖地”として訪れる人も多い場所です。

サブカルチャーに理解があり、その文化的価値を尊重するこの地なら、まんがを地域振興や観光に重ねて、相互に高めていくことができるのではないだろうか、私達は考えました。まんがを通してコミュニケーションの広がる空間、「立川市の代名詞」となれる施設を目指して、成長していこうと考えております。

(立川まんがぱーく HP より)

「まんがが公共施設としてふさわしいのか」など、庁内外からこういった声があがったであろうことは、容易に想像できます。しかし、立川市は、この提案を受け入れ、平成 24 年 12 月にオープンしました。入場料は大人 400 円、子ども 200 円。貸出は行っていませんが、時間制限はなく、館内の約 4 万冊の漫画は読み放題です。また、安価で提供する軽食販売コーナーもあるので、大人だったら 1,000 円もあれば一日中いても苦にはなりません(アルコールもありました)。

館内は、土足禁止なので、どこでどのような姿勢で読むのも自由。また、「[押入れのような空間](#)」がいたるところに設置されていますが、



まんがぱーく HP より

この空間が大人気で、開館後に増設されたそうです。私も中に入ってみました。居心地が良すぎて、一瞬このままダメ人間になってしまうかと思ったくらいです。

ここが、「押入れのような空間」

平成 25 年度の入場者は約 4.4 万人(子ども未来センター全体では 34.6 万人)、独立採算は維持しているとのこと。今までは、行政目的を叶えるためには、公共施設に税金を投入することは当たり前でした。しかし、多くの公共施設を見てきましたが、これほどまでに利用者が居心地良さそうにしている公共施設は見たことがありません。税金は使わずに利用者の願いを叶え、なおかつ、市外からの利用者も呼び込み、にぎわい創出という行政目的も果たしているこの「立川まんがぱーく」、公民連携が実現可能にするこうした公共施設は、今後も続々と誕生するのかもしれない。



つづく